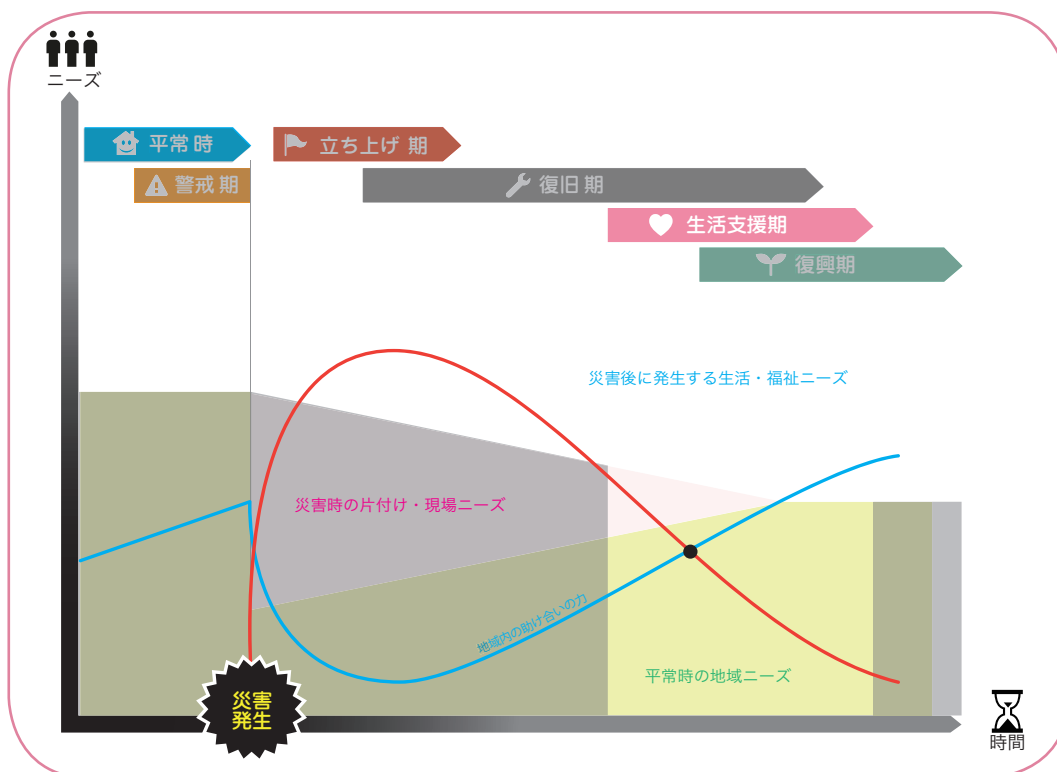




## 5 生活支援期

被災地域の状況も少し落ち着いてくると、災害VCの運営スタイルも状況に合わせて変化させていく時期になります。災害VCのネットワークを活かしながら、個別の生活に関する多様なニーズへの対応を進めます。



## 生活支援期

～多様なニーズへの対応を目指して～

災害VCの立ち上げ混乱期を越え、被災地域の状況も少し落ち着いてくると、災害VCの運営スタイルも状況に沿って、少しずつ変化が必要な時期になってきます。

### 1 生活支援期の災害 VC 運営のポイント

被災した地域では、この頃になると住居の片づけ等が一定落ち着き、学校などが再開されるようになります。早い段階で元どおりの暮らしを取り戻せた人もいれば、災害によって生きづらさが増してしまう人もいます。暮らしを取り戻すスピードは一人ひとり異なって当然のもの。長期的にかつ一人ひとりに寄り添った支援を行っていくためには、地元の団体や住民が中心となる支援体制を目指す必要があります。

### 2 被災者ニーズの変化

生活支援期のニーズは、家屋の片づけや災害ゴミの搬出等の単純作業による支援が中心であった状況から、専門技術・知識を必要とするニーズや長期的な支援を要するニーズへと変わってくる時期です。しかし、そういったニーズはこの時期から急に現れるということではなく、発災直後からあるということを忘れてはいけません。

#### (1) 生活支援期の被災者ニーズの考え方

(参考：復旧期 被災者ニーズの考え方－P.36)

この時期のニーズの特徴を挙げると、次のような傾向があります。

##### ① 日ごろの生活課題の表出・悪化

日ごろから持っている何かしらの生活上の困りごとが、災害を期に思わぬ形で表出したり、悪化してしまうことがあります。普段は自力でできていたことや、サービスやサポートを受けて維持していたことが、災害による物理的な制約によってできなくなることがあります。

##### ② 困っている人はだれか？

災害時には、高齢者や障害者、子ども、妊産婦など、普段から配慮が必要な方へ余計にしわ寄せがいくことがあるため、注意が必要です。また、単身者、一人暮らしの会社員、下宿の大学生や外国人など、普段から地域とのつながりが疎遠であれば、支え合いが必要となる災害時に孤立してしまう可能性もあります。災害時はだれもが当事者になる可能性がある、という視点が必要です。

##### ③ SOSが言えないことへの理解

人は誰しも少なからず「他人に迷惑をかけたくない」という想いを抱いています。それが災害時という緊急時であっても、「助けて！」とSOSを出すことに抵抗があるという心理を、支援者側は理解しておくことが大切です。

過去の京都府内での災害でも「人に頼ってはいけない」「私より大変な人がいるから」など、“SOS”を出すことを遠慮される方がありました。

他人を受け入れにくい抵抗感と必要性を理解する気持ちの揺れ動きを理解し、不安な気持ちを十分に聞き取りながら、共に考え今後の解決策を探していけるような支援が必要です。

## 生活支援期の災害VC運営のポイント

- ☐ 清掃系のニーズから生活上の多様なニーズが発生することを意識する。
- ☐ 表面的には見えにくいニーズもあることから、ニーズの拾い方に工夫が必要。
- ☐ 外部の支援者が多く関わっている場合は、地元のスタッフや団体、住民が中心となる支援体制にシフトできるようにバトンタッチを進める。

### 実践事例

#### 9.11 関東・東北豪雨災害 「おおさきスマイルプロジェクトまごころお届け隊」 宮城県大崎市社会福祉協議会

平成の大合併により1市6町が合併した、人口約13万人の宮城県大崎市は、平成27年9月11日、関東・東北豪雨災害によって甚大な被害を受けました。

発災当初より、大崎市社会福祉協議会では、法人として以前から独自に準備を進めてきていた「大崎市社協DCAT(福祉専門職災害支援チーム)」による被災世帯の訪問調査を重層的に行い、被災した住民一人ひとりに寄り添った支援を目指した災害ボランティアセンターの運営をスタートしました。

災害ボランティアセンターでは、被災者の生活環境(住宅等)の復旧支援活動と平行して、何らかの事情により自分からは声を上げられない方や、被災したことにより福祉的支援が必要となった方々に対する支援ニーズの確認調査に加えて、時間の経過とともに変化していく被災者の精神的・身体的な面での現状の把握、不安や悩みごと、困りごとに耳を傾けるために「おおさきスマイルプロジェクトまごころお届け隊」を実施しました。これは、平時から社協による福祉学習を積極的に取り組んでいた、被災地域の地元小学校からの「子どもたちに何かできることがありますか」との声がきっかけとなり実現した取り組みでした。

この取り組みは、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議を通じて、全国各地の企業からの支援物資を詰めた「うるうるバック」と子どもたちからの心暖まるメッセージを地元ボランティア団体の皆さんが被災者一人ひとりに作成し(大人の力)、実際に地域の子もたち自身と県内の大学生ボランティアがいくつかのチームになって、行政区長さんの案内のもと被災した方のお宅を一軒一軒訪問し、子どもたちが励ましの言葉を伝えました(子どもの力)。被災者支援という目的に加えて、自分たちの地域の被害状況や過去の災害の歴史、当日の避難の様子などを行政区長から子どもたちに伝承する貴重な機会にも繋がりました。

大崎市社協では、こうした大人から子どもまでの地域住民の力を活用しながら、継続的に被災世帯の訪問調査を重ねて行い、時間の経過によって日々変化していく不安や悩み、困りごとをしっかりと受け止め、寄り添い続ける支援を続けています。目の前の泥や家具などの形あるものが片付けばすべてが終わりなのではない、被災者の心に向き合った継続的な支援こそが、本当の意味での復興に繋がると信じてこれからも支援を進めていきます。



# 5 生活支援期

## (2) ニーズ把握のポイント

この時期のニーズは、個別・具体的で表面的には見えにくいニーズも多いことから、こちらから困りごとを抱えている人に接近する心持ちが大切です。各戸を訪問する方法や、被災した住民が気兼ねなく集まれる場をつくるなど、“SOS”を拾う工夫をする努力が必要です。過去の災害の場面でも、地域性に合わせた様々なニーズ把握の工夫が見られています。(事例参照)

※例えば…

- ・訪問活動
- ・サロンなどの場づくり
- ・足湯や行茶
- ・近所の方や友人を通じて etc…



## 見えないニーズをキャッチする工夫～過去の事例から～

### ～足湯ボランティア～

足湯は専門的な知識や設備がなくても実施ができます。お話をしながら手をマッサージし、心と体がほぐれ、心になる不安や迷いなどの「つぶやき」を聞きます。生活課題の把握にもつながります。



### ～行茶ボランティア～

一緒にお茶を飲みながら話を聴くことで、ストレスを抱えている被災者に、心休まるひと時を過ごしていただく活動です。お話する中で、被災者のニーズを把握することも目的としています。



## 参考 避難所について

生活支援期、この頃の被災者はどのような生活をされているのか、避難所、在宅避難、知り合いの家に身を寄せるなどの状況から、今後の見立てと見通しを考えていきましょう。

災害が発生した後、また、発生すると危険が予測される時に避難所は開設されますが、様々なタイプがあることをご存知でしょうか。避難所とは、避難するための施設や場所のことで様々な分類がある中、たとえば次のような用語があります。

(例) 一時避難場所、自主避難所、広域避難場所、指定避難所、収容避難所、福祉避難所

避難所は、被災者が一定期間生活をする場であり、避難所を運営するための体制の確立が必要です。原則的には、「避難者自らが行動し、助け合いながら避難所を運営する」ことが求められます。



1  
平常時



2  
警戒期



3  
立ち上げ期



4  
復旧期



5  
生活支援期



6  
復興期

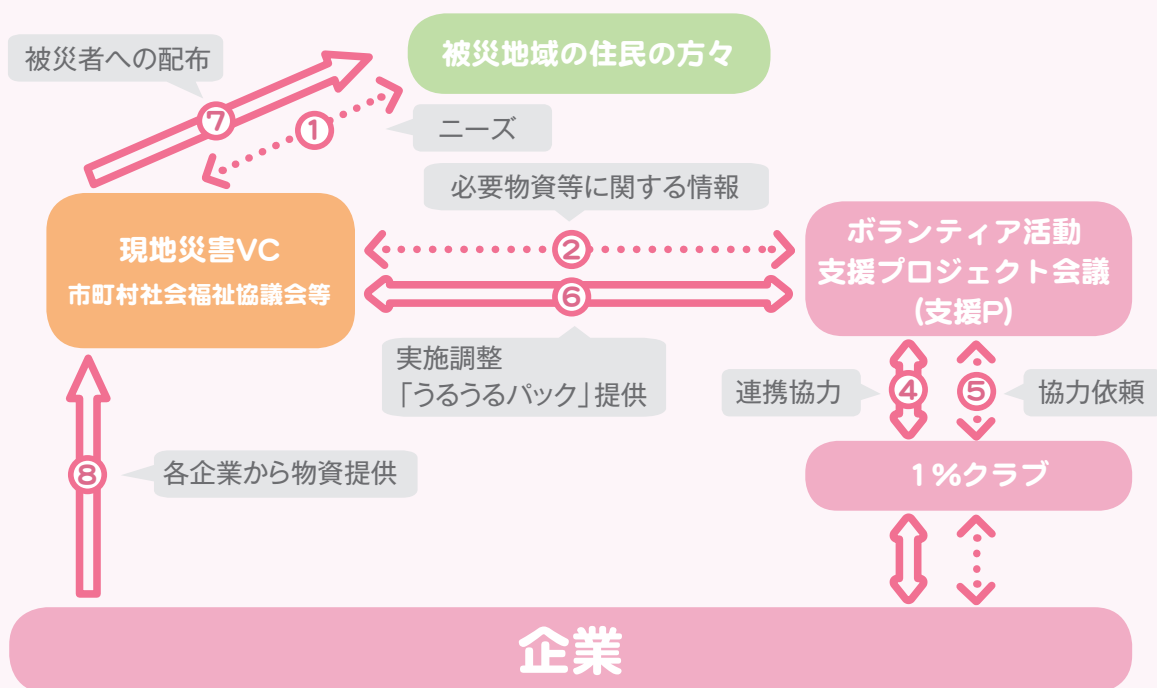


## 参考

### ～うるうるパック～ 災害ボランティア活動支援プロジェクト会議(支援P)

「うるうるパック」は日本経団連1%クラブを通じて、必要な物資を企業に協力を呼びかけ、被災地域の方々が必要とする物資を一旦県外で集約し、各世帯に配布できるようにパックしてお届けするものです。届け先や時期、被災者のニーズによって、女性専用、新入学文具セットなどその詰め合わせ内容にバリエーションを付けています。

また、「うるうるパック」は災害ボランティアセンターで、被災者の方々とのコミュニケーションの円滑化、被災者を応援する心を届ける手段として、知恵や工夫を凝らして配布されています。災害時に活用することができるツールの1つです。



#### 主な「うるうるパック」

- ①被災世帯に配布する基本パック…(タオル、ウェットティッシュ、石鹸等)
- ②新学年応援パック…(ノート、筆記用具、文房具)
- ③ともだちパック…(色紙、ノート、シール、お絵描き帳、クレヨン、パズル等)
- ④乳幼児を抱えた世帯向け親子パック…(ベビーパウダー、おしりふき、ハンドクリーム等)
- ⑤レディースパック…(基礎化粧品、ハンドクリーム、シャンプー&リンス等)

# 5 生活支援期

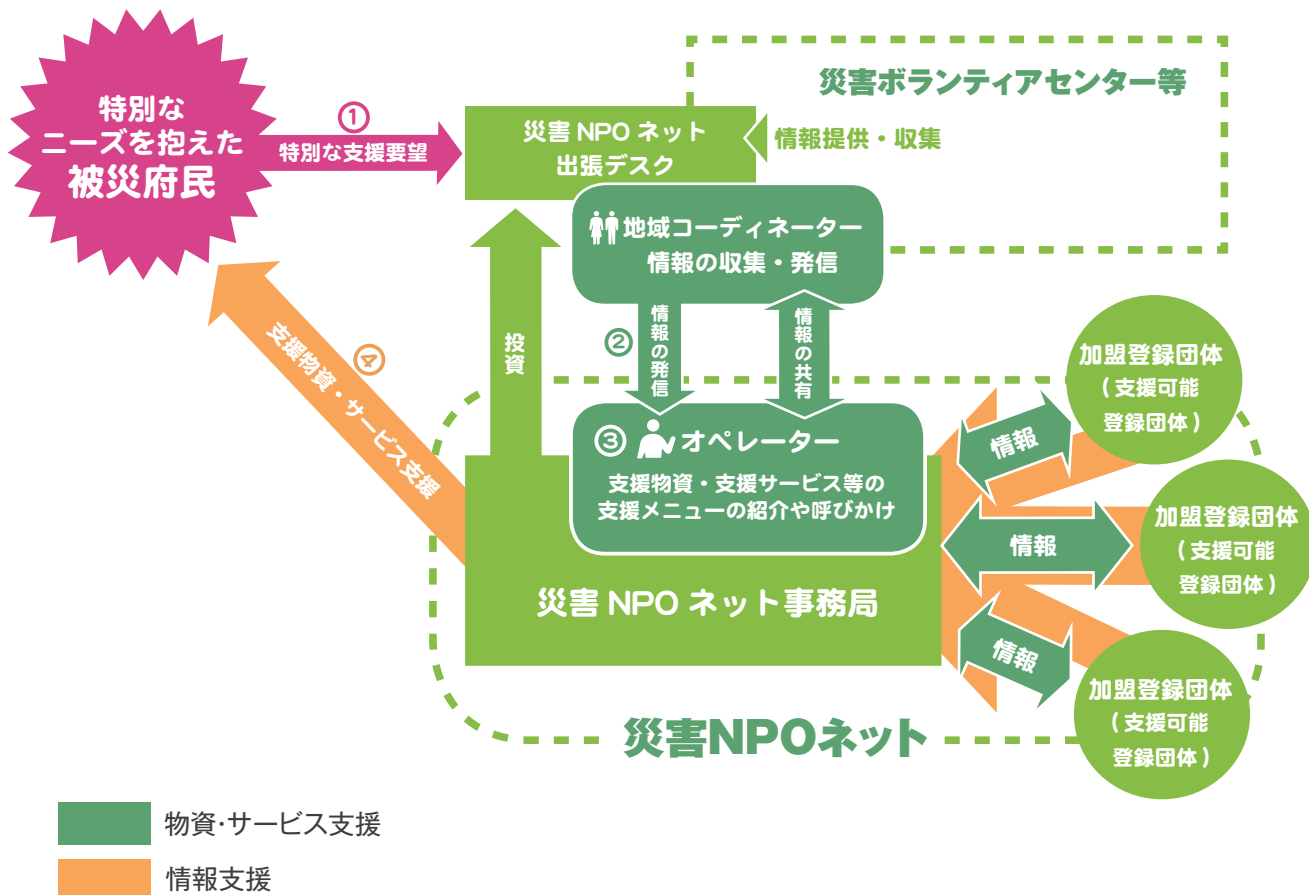
## (3) 多様なニーズへの対応

生活の中で生まれるニーズは様々で、すべてのニーズを災害VCの中で対応することは難しい場合があります。災害VCで対応できる/できないの判断だけにとどまらず、災害VCで対応できなくても、他の団体・機関につないだり、協働したりすることで対応できることもあります。

災害VCを運営する私たちには、コーディネーターとしての機能を活かすことが求められます。日ごろからのつながりが生きる場面であり、この機に新しいつながりを作ることにもつながります。

平成28年5月、京都府の呼びかけにより「～ひと声かけて支えあ～災害時NPO等ネットワーク（略称：災害NPOネット）」が設立されました。このネットワークは、自然災害による被害が京都府内で発生した場合、府内で社会課題の解決や公益性を担って活躍している NPO(NPO法人、自治組織、経済団体等)が有する専門性や豊富な経験を活かし、地域の自治体等との連携により、直ちに「特別なニーズをもった被災者への支援及び NPO 等の相互支援」を行うことができるよう、普段から関係団体がつながりを持ち、支援ノウハウの習得や人材育成、情報交換等を行うことを目的としています。

被災された方の抱える多様なニーズに対して、災害VCだけでなく多様な支援団体と連携し、解決していける体制をつくっていくこととしています。



1 平常時



2 警戒期



3 立ち上げ期



4 復旧期



5 生活支援期



6 復興期

## 実践事例

### 「子育てママに支援の手を！」福知山ママボランティアLINK

平成26年8月、福知山市では2年連続の豪雨災害に見舞われました。福知山市ママボランティアLINKはこの豪雨災害をきっかけに、子育て中の“ママ”たちが「被災したママのために、子連れでもできるボランティア」を始めました。具体的には、親が家屋の片づけをしている間の子どもの一時預かりや、水害によって使えなくなってしまった物資（紙おむつやベビーカーなど）の寄付など、子育て中のママならではの支援を展開されました。

こうした支援は災害VCだけでは手の行き届かないところですが、こうした活動をしている団体を知っていることで、支援の手をつなげることができます。



コラム

## 生活支援期・復興期を迎えるにあたって ～”地域力”と”受援力”を考える～

災害時、支援者の「力や情熱・思い」は、強く感じられる一方で支援を受ける側の準備はできているのでしょうか？助けられることになれていない地域、助けてと言にくい地域性を考えてみたいと思います。

### 【受援力を阻むもの】

受援力は他者に助けを求め、快くサポートを受け止める力です。しかし、様々な要因で支援を受け入れることできにくい被災者もいます。

原因としては・・・

- ・「むら」「和」を維持するために「個」が埋没する地域
- ・「他人の世話にはならない」という抵抗感
- ・「よそ者を拒む意識」
- ・泥によごれていても家の中を見られたくないという思い(プライバシー)
- ・知らない物・事への不安

### 【地域力を高めるとは？】

現在、住民が地域への関心が薄れ、つながることへ無関心になってきています。

しかし、「個人の困りごとをみんなの問題」と共感・共鳴・共有し声を出す(動き出す)ことこそが地域力です。

自らが、大きな声で「わからない」「困っている」「助けて」といえる力をつけること。そして、地域として、声を出せない人の思いに気付き、寄り添い、代わりに声を出し動くことのできる地域をめざしていかなければなりません。

災害ボランティアセンターは、被災した地域がもともと持っている受援力や地域力を理解し「ニーズの掘り起こし」をしなければいけません。できないことを批判するのではなく、現状を理解することが大事です。

また、日常から「助けられ上手」になる地域をつくる活動が求められます。

## 3 支援体制の変化

被災された方のニーズの内容が変化してくると、支援体制もそれに合わせて変えていく必要があります。

### (1) 地元スタッフへのバトンタッチ

多数のボランティアによる支援活動が必要だった時期から、長期的な支援、あるいは専門的な支援のニーズが増えてくると、地元支援団体がメインとなる体制が必要となってきます。災害の規模や地域の状況により、外部支援者によるサポートが大きかった場合は、少しずつ地元のスタッフにバトンタッチできるように体制を整えていきます。

また、当初から運営に関わってきた地元の災害VCの運営団体についても役割の変化や交代の節目としてとらえることもできます。

### (2) 生活上のニーズを聞き取り、対応できる体制へ

災害による生活上の困りごとをキャッチし、多様なニーズに対応するためのセンターの体制を整えます。災害VCの立ち上げ当初から部門として設置しているケースもあれば、必要に応じて新設することもあります。

## 生活支援期の情報・ひと・もの・お金

### 情報



#### 発信

- ・被災者に向けた災害VCの周知
- ・ボランティアに向けた活動情報
- ・災害VC内での掲示  
(地域の様子、災害の概要など)
- ・マスコミ対応
- ・物資支援や募金など被災地でのボランティア活動以外の方法の発信

#### 収集

- ・被災者ニーズの収集
- ・被害状況の収集(公式・非公式)
- ・災害VC支援団体・機関の情報
- ・被災者の生活復興に関する制度情報

### ひと



- ・ボランティア
- ・地元の支援団体
- ・外部支援団体(NPO、NGO、各種団体)
- ・福祉専門職チーム
- ・特定分野の支援を行うNPOなど
- ・被災者の生活再建に関する専門知識やスキルをもった専門家

### もの



- ・個別訪問に活用できるグッズ(うるうるバックなど)
- ・災害VCの活動資金の調達
- ・募金活動の展開

### お金



1 平常時



2 警戒期



3 立ち上げ期



4 復旧期



5 生活支援期



6 復興期